

教育課程部会におけるこれまでの審議経過（案）に対する意見

秋田喜代美（東京大学大学院

教育学研究科）

（案）文書の各番号に沿って、細かな点であるが表現等で気になった諸点について雑多であるが、意見を述べさせていただきたい。

1 学力の確実な定着について

・本審議経過案 P1-P2 だけを見ると、「学力」の議論が学力検査、学力調査の得点で測られるもののみを前提とした狭義の学力について論じられた部分が多い。資質能力のバランスのとれた育成が確実な定着の基礎となっていくことをもう少し丁寧に論じた書きぶりにする必要があるのではないか。

・P2において「児童生徒の発達段階を踏まえると発達の初期段階にある小学校低・中学年の場合は反復練習に対しても適応的である一方、小学校高学年以降は扱う情報が高度かつ大量になるにつれ理解を重視した学習方略が効果的となるため、徐々に学習方法を転換していくことが必要となる。また、学習内容の理解を定着する観点からじゃ、単に問題演習を行うだけではなく、例えば内容を他者に説明するなどの協働的な学習活動により、児童生徒が自らの理解を確認し、定着を図ることが重要である」の文章について、高学年において学習方略が効果的になるので学習方略が使えるようにしていくことには、教育心理学的にも明らかにされており、賛同する点である。

しかしながら、以下の2点については、より詳細な説明の加筆が必要である。第1に、「小学校低・中学年の学習では従順で適応する」ということから、低中学年では反復練習でよく、反復練習のみを推奨しているようにこの1文だけを読むと誤解を与えやすい。小学校低中学年で基礎的な知識や技能の自動化や習熟は重要であり、学習方略の教示はできない。

しかしながら実際には、幼児や低中学年における定着がどのようなものであるかはきちんととらえ説明した方がよいと考える。幼児期から園においてすでに深い探究学習を自らこだわりや問いをもって子どもたちは意欲的に行うことができ、協働することによって理解を深めることで学力の定着をさせている。創意工夫したり、問いを持ち探究し自ら表現することを、低中学年においてこそ学びの

習慣として身に付けることが、深い学びの定着を促すためには重要である。先日の愛媛大学の隅田先生の年長児の報告にもあったように、幼児や低学年が、中高学年も驚くような深い探究を行う事例も数多くある。園における幼児期から得たこうした学び方を小学校低中学年以降にもつなげていくことが、学力の定着や深い理解と確かな学力につながるという視点も必要であろう。これと併せて第2に、「他者に説明をするなどの協働的な学習方法」が高学年以降において有効と読めてしまうが、これは幼児期から小学校低・中学年を含め重要である。児童生徒の発達を段階で線形的に捉えるという見方だけではなく、幼児期から児童生徒の現在の実態を捉え、その可能性をどの段階においても伸ばす社会文化的環境を保証することが大事という視点も加えていただく方がよいのではないかと。

2 個別最適化された学びについて

・会議の中で市川委員が指摘されておられたように、「個別最適化された学び」の語の指示する内容の整理が必要である。ICTによって、興味関心や適性の個別性を大事にすることで方法や内容が選べるような個別性、一人一人の学習速度が異なることにあわせた個別対応、個別のやり方や考え方をより重視するような授業の在り方を行うことなどの意味が含まれる。また一方で、「最適化された」の最適化をするのは誰かということも重要な論点である。ICTによって、大人側が組んだプログラムを実施することで学習速度や躓きやすい点を繰り返し学習し達成が可能となるという意味の最適化もあれば、子ども自身がメディアや表現や探究方法を選ぶことで最適化できるという側面もある。最適化をするのは、大人側という発想だけにならないように、内容や活動に応じて、すべての子どもが学びに夢中になって取り組むことのできるための個別最適化への精緻な議論が必要である。それによってこの言葉だけが独り歩きして、使用されるのを避けるのが賢明であろう。

・P3のGOGAスクール構想の中で「学校の授業以外の場での学習も視野に入れて、指導計画を立案していくが重要である」の指導計画の立案の主語が、書かれていないが誰であろうか。授業者や担任教師だけにより過重な負担が生まれないように、チーム学校として、また各自治体教育委員会や児童健全育成や学童クラブをはじめ地域の児童生徒の居場所における支援、地元教員養成大学の学生などのボラ

ンティアなどの記載があってもよいのではないかと。条件整備や人的体制について書いてくださっているが、ICT 支援員だけで学校以外の学習までは実際には難しいであろう。

4 . 授業時数に関して

・P6 にあるように、時間割やコマの考え方をより柔軟に、学年や教科内容に応じた弾力的な運用が必要であり、各学校が教育の重点に合わせて、時間を活用しているカリキュラムマネジメントの具体的な先進事例を紹介していくことが授業における時間の質を考える上で有意義である。

5 STEAM 教育等の教科横断的な学習の推進について

・STEAM 教育の出発点は、海外等の事例をみると、多くの国が幼児期からの学びの連続性の中で小中高校へとつながることを指摘している。その意味では、学校医教育の始まりが幼稚園であることもふまえた表現を入れていただくことが重要であると考えられる。OECD の幼児教育・保育の国際比較従事者調査 2018 においても、我が国は幼児期からの科学的概念の育成などにおいて海外と比べて弱い点が、報告書において指摘されている。

・STEAM のための教員養成や現職教育の在り方もあわせて検討をしていくことが、特に中等教育レベルでは重要になると考えられる。

6 ICT の活用について

・当該部分の意見だけを読むと ICT が知識の習得、教師が教えるべき内容を提示するもの、教師側が生徒の興味を引き出すコンテンツを提示するものとして活用されることに力点があるように読める部分がある。しかしながら、ICT は児童生徒が探究し表現し、ノート等を保存することで共有が個人間を超えてでき、自らや学級の学びを振り返る道具としての有用性が、ICT をうまく活用している学校では見られる。こうした側面も大事にしたいと考える。